

絡繰り館

「おにいちやーん！」

おぼつかない足取りで子供達が駆けていく。

時は戦争の只中。けれど風はまだ暖かく、過ぎしやすい春の日だった。笑顔を咲かせる子供達の輪の中心に居るのは、日差しを受けて眩しくはためく白いシャツに身を包む青年であった。

青年はしゃがみ込んで駆け寄ってきた子供達の一人を抱き上げ、笑う。

「また来たのかい？」

「うん！だってお兄ちゃんのおうち面白いんだもん！」

「それはよかった。」

青年が歩き出すと、子供たちもニコニコ笑いながらついてくる。足を踏み入れた洋館は、青年の家だった。玄関の前で髪の毛の長い女性が白いワンピースの裾を抑えて微笑んでいる。

「…いらつしやい、今日もゆつくりしていつてちようだい」

「わーい！」

女性が開けたドアをするりと潜り抜け、子供たちがまるで遊園地にでも来たかのようににはしゃぐ。青年はそれを見て自然と笑顔になった。

戦争の惨禍で焼け野原となった街中で、その洋館だけが異世界のようにそこに構

えている。切り離された空間が、今の青年には唯一であり絶対的な世界でもあったのだ。

女性を引き寄せ、肩を抱く。青年は子供達の溢れんばかりの笑顔を目に焼き付ける。

暖かい風が一筋、吹き抜けた。

「……ようこそ、絡繰り館へ。」



「日向ナイスキー！」

「うっす！」

森然高校第一体育館の床に、ボールが叩き付けられた。

菅原に背中を叩かれた日向は、掌を打つボールの感覚を噛み締めるようにぎゅっと握りこむ。窓の外はすっかり暗くなり、夕食の時間はとくに過ぎてしまった頃だ。

第一体育館に残って未だに自主練をしている者はまだ多かった。

「おーい、そろそろ上がんねえと夕飯食いっぱぐれっぞー」

体育館のドアから顔を出したのは、森然の主将だった。首にタオルをかけている

ことから、既に入浴も済ませたことが分かる。息切れで弾む胸を抑え、澤村は時計を見上げた。

夕食の時間も、烏野の入浴時間もうに過ぎていく。練習に夢中になって気がつかなかったのだ。

「…皆そろそろ上がるう。夕飯は食わないとな」

「…俺もうちよつとサーブ練習してこうかな…」

「いいからメシは食う！」

「すみませんでした」

澤村の一声で烏野のメンバーはぞろぞろとコートを出て、壁際のドリンクやタオルに手を伸ばす。木下と成田は掃除当番、マネージャーや先生は入浴の時間のため居ないが、それ以外は全員が自主練のために体育館に残っていた。

「日向、風呂入ったら打ち合わせすんぞ」

「おう！」

影山はタオルでガシガシと頭を拭きながら日向に言った。日向は目を輝かせて頷く。

「…ほら！そんなところで死んでないでさっさと起きろリエーフ」

「ちよ、さんさんレシーブ地獄やっというからのそれですか！？鬼だ！夜久さん鬼だ！」

「研磨も水分取つとけよー」

「……疲れた…なんでおれまで居残り…」

床で伸びる灰羽を引きずるのは音駒のリベロの夜久、そしてその隣で不満げに言う孤爪にドリנקを押し付けているのは、主将の黒尾だ。そしてもう二人、自主練で残っていた梟谷の木兎と赤葦もスパイク練を終えてコート脇に戻ってきた。

「まだまだ打ち足りねえ！赤葦、明日も頼むぞ！」

「あれだけ打つと言ってよくそんなこと言えますね…スタミナ馬鹿ですか」

「あつツッキー！明日もブロック練やろーぜ！」

「話聞けよ」

何故全員が第一体育館に居るのかというと、あまりに遅くまで居残りすぎたため、第二体育館と第三体育館に居た者たちが閉め出されてしまったのだ。そこで唯一空いていた第一体育館に全員が転がり込んできた、というわけだった。ただ、いくら体育館が広いと言っても、この人数はさすがに暑苦しい。

月島が早々にその場を去ろうとした時、今度は生川の主将がひょっこりと顔を覗かせた。

「まだ居たのかお前ら。良い子は早く戻らねーと、『絡繰り館』に連れてかれるぞー」
「お前いつもそれだな！」

生川の主将はニヤニヤと笑みを浮かべたまま、戻っていく。黒尾はその言葉に呆

れた仕草で肩をすくめた。わざとらしいため息に、月島は関わらないほうがいいと思つたが、案の定日向が話を振つてしまった。

「なになに、なんですかそれ！」

「知りたい？チビちゃん」

「ハイ！」

途端に黒尾が得意げな顔になつて座り込む。

ちよいちよいと手招きをし、全員を円になつて座らせた。月島は帰ろうかと思つたが、木兎の「ツツキーもしかして怖いのかー？」という馬鹿ばかしい挑発に乗つてしまい、結局渋々その輪に加わる羽目になる。

「いいか、今から話すことは全部本当のことだから。心して聞けよ？」

「…夕飯なくなつても知らないから…」

スイツチが入つてしまつた黒尾を孤爪が睨む。澤村が夜久か赤葦あたりが止めてくれることを祈つたが、意外にも乗り気なようで、月島はついに諦めてサポーターを床に置いた。

幾分か熱気の逃げていった体育館に黒尾の声が響く。

「…これは俺たち梟谷グループが合同合宿やる度に必ず出てくる怪談話なんだけだよ」

そして黒尾の話が始まつた。